

ニッポン

ドクター和の



臨終凶巻

昭和40年代、日本のフォーク音楽をリードしていたはしだのりひこさんが12月2日、72歳で旅立ちました。パーキンソン病で死去との報道でした。

訃報が流れたその夜、桑田佳祐さんがラジオで「日本のポール・サイモンだった」と追悼し、ヒット曲『風』をかけたことからも、音楽シーンに大きな影響を与えた人物だったことがわかります。

はしださんの長女によると、パーキンソン病を患ったのは約20年前。9年前に奥様を亡くされた頃から体調が悪化したようです。

高齢化に伴い、パーキンソン病の患者さんが増えています。脳幹

34 はしだのりひこ

長尾和宏（ながお・かずひろ）
東大医学博士、大阪府立第二医科大学第二内科局長尾クリニックを開業。外来診療で在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。近著「薬のやめどき」「痛くない死に方」は、関西国際大学客員教授。

部にあるドパミンという神経伝達物質が減少する病気で、手足の震えや歩きにくさを感じるものが初期には多く、進行に伴い、両手足にこわばりなどの強い症状が出てきて、日常生活に支障が出てきます。

抑うつ障害や幻覚、睡眠障害や頻尿、認知機能の低下なども現れることがあり、最近注目されているレビー小体型認知症と

はしださんの場合は、20年間も難病と共存できたのですから、立派な闘病であったと思います。



今年4月には、きたやまおさむさんと杉田二郎さんと一緒に、車椅子で京都のコンサートに参加。『風』を披露したそうです。

しかし、翌5月に急性白血病を発症。抗がん剤治療を受けて、いったん改善したものの、これにより抵抗力が落ちたのでしよう。パーキンソン病も悪化。嚥下（えんげ）機能が低下し、食事が難

症状が重なるため、誤診されたり、誤った処方されたりして悪化してしまうケースも実は多いようです。進行を遅らせる薬はありますが、完治させる治療法はまだ確立されていません。進行具合は人それぞれで様ではありませ

しくなっていました。パーキンソン病が進行し、食べられなくなった患者さんに胃ろうを造るか否かは、年齢や状態によって答えは違ってきますが、はしださんは胃ろうを造らなかつたようです。

「最期にステーキを食わせろ」と食欲を示していたようですし、死の10日前には、病院にお見舞いに来た仲間たちとギターを弾いて歌ったそうで、周囲の人も「ありえない！」と驚いていたようです。

危篤状態になってからも息子さんにアイスクリームをスプーンで数口食べさせてもらい、満足だったと言います。

長い闘病生活ではありましたが、最期まで音楽を楽しみ、食べることができたのですから、見事な平穏死です。パーキンソン病であっても最期まで人生を謳歌（おうえん）しよう。多くの患者さんに、暖かい「風」のようなメッセージを残してくれました。

最期も歌って残した「風」